

看護における継続教育の検討

— アンケート「看護婦の教育ニーズの」回答より —

東8階：小野千恵子

1. 研究目的

看護婦の真の卒後継続教育は、日々の看護業務の中から自己啓発し展開してゆくものである。又現場での看護展開、自己啓発の動機付けとしての院内年次研修が、研修者にどの様にとらえられ活用されているかを知ることは看護婦の教育に携わる者の任務である。教育する側は教育を受けている人々のニーズをとらえ振り返る必要がある今回院内年次別研修に関する看護婦の考え方をアンケート調査より検討した。

2. 研究方法

1. 対象：S大学病院の（2年次から婦長まで）看護婦344名である。

2. 調査方法：

1) 年齢、職位、住居、等かからなる属性に関する設問1項目、システム化、現場との結びつき、自己学習とのつながりなどから成る院内年次別研修に関する設問9項目についてハイ、イエエから成る選択式質問紙調査を実施した。

2) 院内年次別研修に対する設問9項目について、さらに自由記述式による意見を求めた。

3. 結果及び考察

2件法による回答では317名（92.1%）が有効回答であった。今回は調査項目2の年次別研修に関するものに限り分析した。ハイと回答した人の割合が他群に比較して低かったのは自分自身の教育目標に関してであった。システム化、講師、企画に関しては現状で良いと言う回答が約8割を占めていた。しかしそれが自分達の学習につながらない、と言う矛盾した結果となっている。そこで9項目の意見から実態を知ることにした。意見に関しては317例中205例（64.6%）が分析可能であった。意見は46項目に分類した。因子分析（バリマックス転回）した結果34.3%の累積寄与率で8因子を抽出した。8因子はそれぞれ積極的協力因子、消極的非協力因子、受動的協力因子、非協力因子、改善希望因子、研修遊離因子、現実希望因子、研修理想因子と命名した。算出された因子得点は前述の属性群と、挫折体験の有無で比較し有意差の検定を行った。属性群の中で顕著に有意差を示したものは部門であった。部門は（中央診療、外科系、内科系）に分け検定を行った。分散分析ではf1の積極的協力因子に於いて住居との比較で $F(2.199) = 8.61$ $P < .01$ で有意差があった。挫折体験の有無ではt検定で非協力因子に有意差がみられた。

以上の結果より部門別では差があった。又看護婦の意見の分析から看護の経験と共に研修に対する要求が複雑になって行くことが示唆された。